北海道大学大学院医学研究科／医学部

広　報

第　12　号

2001（平成13）年4月

退官にあたって

感覚器病学講座・耳鼻咽喉科・頭頸部外科学分野　教授　犬　山　征　夫

私が北大耳鼻咽喉科学教室に教授として赴任しましたのは昭和63年12月16日でした。

初出勤の日は雪が舞っており、思い出深い美しい朝でした。朝、教室員と顔を合わせ、挨拶に際して三つのことを行おうと考えました。すなわち一つは教室員一人一人をよく把握し、適切なアドバイスを与え、叱咤激励すること、第二に同門会と医局との関係を密にすること、そして第三に関連病院の人事を安定させるために努力すること、であります。一方、仕事の面では、先代の寺山教授は耳科学、とりわけ難聴の基礎と臨床について幅広い研究を展開されてこられました。一方、私は頭頸部外科学および腫瘍学が専門で、癌化学療法、放射線治療にも大変興味をもって過去25年にわたって取り組んで参りました。また私が赴任して間もない2月23日に外来が新棟に移転したこともラッキーでした。さて問題は医局員といかにして仲良くなるかでした。いろいろ話を聴いておりますと、皆、歌が上手で、カラオケが好きであることがわかりました。そこで、早速、教室員とカラオケに行き、思う存分歌いました。若い医局員とは年令がかなり離れているため、私はもっぱらシャンソンやラテン系の歌を原語で歌って煙に巻く作戦にでました。そんなことで忽ち教室員と仲良くなりました。やがて冬も終わり、春の訪れを感じるようになりました。雪が消えると、教室員達が医局の外でキャッチボールを始めました。私もスポーツは好きなので、仲間に入って、久振りにキャッチボールを楽しみました。そのうち、院内対抗や三大学による野球試合なども始まり、私も慶大ではキャッチャーをやっていましたが、流石に今はしんどいので二塁手として出場しました。しかし、とうとう怪我をする時がやってきました。はっきりした日時は忘れましたが、ある時、バッターボックスに入り、2球見送ったのち、3球目を見事に三遊間に打ちましたが、誰かが自分の脚をバットでひっぱたいたような気がしました。すると右足の“ふくらはぎ”が腫れ、内出血していました。最初はアキレス腱を断裂したかと思いましたが、歩けるので安心しました。早速、整形外科を受診したところ、腓腹筋の断裂と診断されました。幸い入院の必要がなく、ゆっくりであれば歩けるのでほっとしました。

一方、学会の方では、平成6年6月22〜24日にかけて第18回日本頭頸部腫瘍学会の会長を務めました。そして理事会の席上で、本学会の理事長を務めることになりました。また、平成9年5月22〜24日にかけて開催された第98回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会において「頭頸部癌治療における化学療法の役割」と題して宿題報告を行いました。さらに翌年には、第99回日本耳鼻咽喉科学会総会・学術講演会を札幌市で開催しました。この時は、廣重　力・前北大総長より「成熟社会における徳の復権」と題した特別講演を戴きました。

ここで少し話題を代えますが、平成3年5月に廣重医学部長が総長に就任されたため、先生が担当されていた医史学の講義を阿部教授、皆川教授そして筆者の3人で担当することになりました。私自身もフランスのリヨン大学留学中に、医史学に関する博物館を見学したり、多くの資料を手に入れることができました。ある時、耳鼻咽喉科関連の雑誌の中に「古典あれこれ」という欄があるのを知り、平成3年頃から原稿を投稿し始めました。その後、医史学に大変興味を持ち、吉田信先生が主宰される北海道医史学研究会に入会するとともに、日本医史学会にも入会しました。そして、吉田先生が第97回日本医史学会総会を札幌で開催されるに際して、その記念に会員の分担執筆による「北海道の医療　その歩み」という著書を北海道医史学研究会で出版することになり、私は「北海道における西洋医学の受容－フランス医学を中心として」というタイトルで原稿を纏めました。このことは私の生涯においても大変嬉しい思い出になりました。

さらに平成11年10月21〜22日にかけてThe 5th Japanese-Sino Conference in Otolaryngology、Head and Neck Surgeryを同じくロイトン札幌で主催しました。この時は学会開催日の少し前に台湾で地震があり、謝地先生にお電話で御相談したところ、「どうぞ予定通り開催して下さい」とのお言葉を戴いたので開催しました。幸い台湾の先生方も多数参加して下さいました。Farewell Partyの席上で次回の会長 Tyrone Wang先生に学会中に行った募金を差し上げたところ、先生はとても感謝され、涙を浮かべておられたのが大変印象的でした。

こうして私の定年も近づいてきました。3月22日に行われた教授会で井上研究科長から、私に「名誉教授」の称号が授与されることが決定したとの報告がなされ、私も感慨無量でした。

最後になりますが、北大大学院医学研究科および北大附属病院の益々の御発展をお祈り申し上げ、私の退官の言葉に代えさせて戴きます。

医学研究科長・医学部長に就任して

分子生化学講座・分子生物学分野　教授　西　　信　三

4月1日より、井上芳郎教授の後任として医学研究科長・医学部長を務めることになりました。2期4年に亘る井上教授の業績を引き継ぎ、それを発展・充実させなければと考える時、その責任の重大さに身の引き締まる思いが致します。それと同時に、井上教授の今迄の御尽力と御苦労に深く感謝しているところです。

私は、井上教授のもとで3年間教務主任を務めさせて頂き、御相談を受けたり、時には、意見や考えを述べさせて頂く機会がありました。その経験は私にとりまして大きな支えであります。また、そのことを通して、これからの任期中に為すべき事がかなりの部分見えてもきます。

現在、大学院重点化を終え1年になりますが、その内容の充実を目指し、着実に歩みだす必要があります。周産期医学分野担当の水上尚典教授および医療経済システム学分野担当の松浦亨助教授は4月1日に着任します。残されている教授選考は腫瘍内科学分野ですが、成るべく早い時期に終えたいと思います。本年の入学者は137名で定員110名を越えています。増加する大学院生にどのようなカリキュラムを効率的にまた無理なく提供し得るのか、至急に検討が必要です。学部（研究科）や学内のみでなく、全国的な大きな課題として、「国立大学の独立行政法人化」の問題があります。『国立大学の独立行政法人化については大学の自主性を尊重しつつ大学改革の一環として検討し、平成15年までに結論を得る』との閣議決定がなされている事実を前に、私達も真剣に対処しなければならないと肝に銘じているところです。つい最近、学内には叡智を結集した法人化問題検討ワーキンググループが設置されました。副学長就任予定の井上教授が座長をつとめますので、連携して対処したいと思います。新聞報道によれば、4月から東京・京都にある4つの美術館と、東京・京都・奈良にある3つの博物館は、いずれも「独立行政法人」に移行し、各々「独立行政法人国立美術館」、「独立行政法人国立博物館」となるとのことです。この動きは世界的なものであり、各国美術館・博物館が各々の伝統と歴史を基盤として残しながら「独立行政化」に向かって努力しているとのことです。国のスリム化を目的とする改革が1つの世界的な潮流である時、私達もそれに向かって相互に智恵を出し合いながら「独立行政化」を目指さなければならないと考えます。今後、種々の問題解決のための各研究科間などでの話し合いを進める上で今迄以上に協調性と忍耐が、求められると考えます。私は微力ではありますが努力していく所存です。

また、医療技術短期大学部の医学部保健学科への改組については、医学研究科の修士課程の進行状況に合わせ、保健学科の修士課程も組み入れていけたらと考え進められていましたが、文部科学省の方針の変更があるようで、それに対応した再検討が必要です。

急を要する問題の1つである、医学研究科・医学部教育研究棟の再開発は、北大施設部さらには文部科学省の理解が得られてはじめて進められる性質のものです。この課題につきましても先程述べました様に、協調性と忍耐とをもって当たらなければなりません。遺伝子病制御研究所、歯学研究科など、教育研究に関して共通の認識を作り上げ、分かち合うことが求められているからです。ご担当していた方々のご努力により、私は良い感触を持っています。

医学部入学試験方法は、平成14年4月入学者から、前期日程の入学定員が85名から80名に、後期日程の入学定員が10名から15名なります。また、学士編入試験が始まり、入学者5名が秋までには決定され、4月に3年次に編入されます。

今迄述べてきました様に、医学部の抱える課題は多岐に亘り、大きく立ちはだかっておりますが、長嶋教務主任、宮坂教務副主任、加藤病院長にご協力をいただき、それらの解決を目指す様努力する所存でおります。教職員の皆様には、すでにご協力を御願いし、各部署での役割を快くお引き受け頂いております。事務職員の皆様には変わらぬご協力とご支援を賜りますよう御願い致します。

最後に私の略歴を述べさせていただきます。

昭和16年10月1日　北海道に生まれる
昭和35年3月　小樽桜陽高校卒業
昭和41年3月　北海道大学医学部医学科卒業
昭和46年3月　北海道大学大学院医学研究科修了
昭和46年8月　北海道大学医学部生化学第一講座　助手
昭和49年10月　〃　講師
昭和55年4月　山梨医科大学医学部生化学講座　助教授
昭和58年10月1日　北海道大学医学部教授　現在に至る

指導をいただいたのは先任教授の故平井秀松名誉教授です。

病院長就任にあたって

癌制御医学講座・腫瘍外科学分野　教授　加　藤　紘　之

このたび、藤本征一郎病院長の後任として病院長を拝命しました。病院長室には歴代の病院長の写真が飾られておりますが、その学問的業績はもとより、病院の発展・充実に尽くされた先人の様子を想い浮かべますと一段と身の引き締まる思いです。幸い、副病院長として1年間、藤本病院長のもとで勉強させていただいたことから、比較的スムーズに関係各位との打ち合せを済ますことができ、業務の継続と新しいスタートを切ることができました。

現時点で附属病院が当面する最も大きな課題は、独立行政法人化が進む中で、病院をどう管理・運営して行くかであります。全学的には井上芳郎副学長のもとに北大の英知を集めたワーキンググループが形成され、小生もその一員に加えていただいていますが、附属病院の財政的問題は北大全体の問題に置き換えられることになることから、責任の重大さを痛感しております。もとより附属病院の使命は、先端的医療の開発と実践であり、その中で若き医療関係者の育成をはかることであります。財政的問題は避けて通れない問題ではありますが、本来の目的をしっかりと見据えて諸問題に取り組む所存です。院内の懸案事項として、リスクマネージメント、情報システムの稼動、救急患者への対応、院内感染への対処、設営効率の向上、入院外来患者の増加への対応などが山積しております。このような難問に立ち向かうには、院内に働く皆さんの積極的なお力添えが何より肝要であります。良い医療環境、良い職場環境は一人一人の努力と和によって築かれます。幸い、よく整備された委員会組織がありますので、各委員長にはその活性化をはかっていただき、公平性、先見性を貫いた運営をお願い致します。

私自身、この重大な責任を果し得る能力を持ち合わせているか疑問ですが、小林邦彦教授、杉原平樹教授が副病院長として体制を固めて下さることになり、大変、心強く、ありがたいことであります。このトロイカ方式をもって、2年間の職務を全うしたいと考えております。

よろしく御指導の程、お願い申し上げます。

退任の挨拶

神経機能学講座・分子解剖学分野　教授　井　上　芳　郎

平成9年4月から4年にわたり、医学部長および医学研究科長を務めました。私にとりましては予期しなかった医学部長就任でしたのでスタート時は、心の準備がないまま大学院重点化への作業を引き継いだこともあり、ストレスの多い日々でした。しかし、重点化の作業が教職員の方々のご協力と、教授会の合意のもとで比較的円滑に進んだことが、若干の心の余裕を持たせることとなったと思っております。心よりお礼申し上げます。

思い出しますとこの4年間は本当にあっと言う間の時間でした。医学研究科・学部にあっては、2年続いた大学院重点化の作業と規約やカリキュラムの整備、新設分野の研究室の確保、18名の教授の選考、医学部学生の学習環境の整備やOSCEなどの新しい教育法の導入、学士入学の導入、増え続ける倫理委員会の開催と運営、医学教育の全国的な再検討の流れに対する対応などがありました。学内にあっては、部局長会議と評議会、色々な専門委員会の座長（答申を出していたものだけでも、大学院の共通授業を公式に立ち上げた「共通授業検討専門委員会」、平成のポプラ並木や北24条周辺の植林や、老木を伐採することで新聞を賑わした「キャンパス環境専門委員会」、校費の配分方法を再検討して、中央経費に一部留保するシステムを作った「教育研究基盤校費検討WG」）、およびその他大学の将来像を議論する重要な委員会などがありました。学外にあっても医学部長会議とその下の小委員会の委員、医師会関係、その他の財団の委員等々あり、これら非常に多くの会議や事務処理や色々な事態への対応に追われたことで時間が早く過ぎ去ったと思います。

このような状況でしたので、長期的な見地から医学研究科・医学部の計画的な運営が余り出来なかったことが若干気残りです。現在、国立大学の法人化問題が現実味を帯びる状況ですので、早急に中長期な研究科・学部としての教育・研究・運営管理の計画を練り上げる必要があります。しかしながら、大学の根幹は、学問を自由に行えること、その成果を背景に教育に貢献することですので、設置形態に右往左往するよりも、現在の各教官の立場を自ら点検して、研究にも教育にも強い大学組織にするように計画を立てて進むしか対応策はないと考えています。ぜひ、他を批判することよりも、まず自己の努力を打ち出して欲しいと思います。

西信三新研究科長のもとで、全教職員が協力しあって、素晴らしい教育研究環境を作り上げることを期待して退任の挨拶とします。

病院長退任にあたって

生殖・発達医学講座・婦人科学分野　教授　藤　本　征一郎

平成11年４月１日に、前病院長 川上義和教授の後継として医学部附属病院長を拝命しましてから多忙の２年間が経過し、いまほっとして胸をなでおろしているところです。この２年間を振り返ってみまして、大過なく病院運営のかじ取りができたものと思われ、先ず最初に、あたたかいご協力をいただきました教職員の皆様各位に心底より感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

歴代の病院長のもとに過去10年以上にわたる病院再開発事業（Ⅰ～Ⅲ期）も終了し、駐車場の整備・拡大と有料化、緑地造成などの第Ⅳ期計画とも位置づけられる整備と、国の行・財政改革と並行して病院の運営・経営の改善のための具体策の策定・実行とが、平成11年度から進行しました。大学院医学研究科の重点化も軌道にのって、21世紀へ向けてさらなる飛躍が期待されている時期に附属病院長をお引き受けいたしましたことに、その使命と責務の大きさを痛感しました。北海道大学創基以来の教育理念の根底に流れている「Be ambitious」と「実学」の精神を受け継ぎ、『時代のニーズを先取りし、高度先進・先端医療の研究（translational research）と提供を行い、人間に優しい医療を地域社会に展開すると共に心豊かな国際的医療人を育成し、以て人類の福祉に貢献する』ことを北大病院の理念としております。

現在、本院には26診療科と15中央診療施設とが設置されており、薬剤部、看護部、事務部の３部門を有します。平成12年度の診療基礎資料（平成13年２月迄累計）によりますと、平均在院日数は31.0日、病床稼働率は91.0%、外来患者数（１日当たり）は1,919.5人などと、前年度より着実に改善されています。経営基盤の脆弱は運営の非力化を招来し、教育・研修・研究の展開を阻害することにもなります。本院を継続的に発展させるためには、病院経営の継続的かつリアルタイムな改善努力が常に不可欠でありますが、教職員各位の努力により、経営面にも明るさが少し見えはじめてきていますので、大学病院本来の使命である教育・研修・研究の展開のためにも、高度先進医療のより一層の充実、職種を越えて改革意識に富む人材の育成、勤務条件・環境の整備とに、改善の対象が今後は向けられて行かなければなりません。

北海道大学が国の内外においてその責任を果していくためには、本院の今後の在り方も大切です。他部局との連携の強化および有機的結合を視野にいれた、ヒト生命科学の教育・研修・研究・診療における学内共同利用機関的性格を有したヘルスサイエンスセンターとなる必要があると考えます。このことにより、医学の発展、医療の質的向上が期待でき、限られた人的資源であるコメディカルスタッフや事務スタッフなどの、より有効な活用が可能になると共に、全学的なヒト生命科学研究の進展に大きな役割を果していくものと思われます。

行・財政改革の中にあって、本学の運営・経営面における本院の存在は大きく、二十一世紀の本学全体の健全にして飛躍的な発展のためにも、本院が果すべき責任にははかりしれないものがあります。

新病院長の加藤教授、新副病院長の小林教授、杉原教授のリーダーシップのもとに、われわれの北大病院がわれわれの汗と努力で、われわれの希望する軌道を歩み続けることを祈念いたしまして、病院長退任のご挨拶とさせていただきます。

教務主任に就任して：落第は減るか

神経病態学講座・分子細胞病理学分野　教授　長　嶋　和　郎

前任であった西教授が教務主任の職務内容を調べて本紙「広報」の1998年１号に記載している。大学院を含めた教務関係の諸問題を審議する教務委員会の委員長となることらしい。私も北大に来て15年経ったが、病理診断の精度を高め、学生に病理学の面白さを伝え、さらに高い研究成果を残していくには、これ以上忙しくなっては無理なので、「勘弁してください」と研究科長にお願いした。西先生は「出来るだけ仕事の分量を減らすので、宜しくたのむ」と言われたので、お受けすることにした。

この間、大学院重点化も順調に進み、多くの懸案事項は解決して来たので、さほど大きな変革は無いと思う。何も知らないので西先生はじめ事務の方々にいろいろご支援を御願いすることになると思うが、時々、西先生とは一緒に“環境調査”を行っているので、その折にでも仔細を御教え頂ければ幸いと思っている。

私が知る限り、教務委員会の最大の任務は学生の及落を教授会に諮ることのようである。今度、私が教務主任になると某学生に言ったら、「これで卒業まで落第は免れそうだ」という世評が学生間に広まったそうだが、「これで安心して学業に専念できる状況になったためか」と私も安心している。

教務副主任を拝命して

病態情報学講座・放射線医学分野　教授　宮　坂　和　男

田代邦雄教授の後任として、教務副主任を命ぜられました。臨床系カリキュラム実施委員会委員だったからと思いますが、正直な所その任務を十分に把握している訳ではありません。前任の田代教授を始め、各先生方のご助言を得て、なるべく早く実情を理解したいと思っております。平成７年に始まった学部一貫教育による新カリキュラムと旧カリキュラムの混在した複雑な時期が終わり、臨床医学教育は臨床実習により重点を置いたカリキュラムとなりました。昨年度より新しい形の診断学実習と自主演習が加わり、試行的に客観的臨床能力試験（OSCE）が行なわれました。

診断学実習はＭ５学生が医療面接・診療録記載、身体所見の取り方、救急対応、外科基本手技など10コースを10日間でローテーションするものです。学生の評判も良く、向後更にビデオと講義の組み合わせ方、ローテーションの方法等を含め、担当各科の実施委員の先生方と講義内容を検討して行きたいと思っております。自主演習はＭ６学生が夏季に６週間、自主的に臨床を演習する正規の授業です。学生各自が臨床実習で得た体験と関心を基に、自由に実習内容を決定し臨床体験を深めるもので、海外医療施設での体験を希望する学生もおります。各科並びに関連施設の先生方のご協力を得なければなりません。宜しくお願い致します。OSCEは患者へのインタビューや身体診察等の基本的臨床技能をテストするものですが、近い将来医師国家試験の正式な試験科目となります。これからは医療面接や診察を行なう部屋数と評価者を増やし、Ｍ６学生全員にOSCEを行なう必要があろうかと思っております。

担当の先生方にはご多忙の中で時間を取って頂く事になりますが、宜しくお願い致します。新カリキュラムが軌道に乗った様に見えますが、改善が必要な所も多々あるかと思います。重ねてご協力、ご助言の程宜しくお願い申し上げます。

新任教授紹介

就任にあたって

生殖・発達医学講座・周産期医学分野　教授　水　上　尚　典

2000年11月29日夜10時頃、生涯４度目となる千歳空港に降り立ちました。翌日、北大医学部教授会の前で30分間講演をするためです。札幌周辺は記録的に早い大雪ということで私の住んでいた栃木県でも大きく報道されていました。その時千歳は氷点下７度と飛行機内でアナウンスがありました。夜遅く千歳から札幌に移動するJR車窓よりみた景色は素晴しいものでした。札幌駅に降り、何度も転びそうになりながら夜11時過ぎ駅近くの全日空ホテルに到着することができました。翌30日夕方、タクシーで北大医学部に移動する車中より生涯初となる北大建築物群に接し、その大きさに驚きました。夜６時15分から30分間講演し、15分間の質問を受けました。その後小雪の中、煌々と光る大きな北大病院を何度も振り返りながら徒歩で30分かかってホテルに戻りました。もう、戻って来ることはあるまいと。12月14日夕、北大より吉報が届きました。2001年４月１日着任と決まり、その準備のためにその後忙殺されましたが、いつも心のなかには私の想像する北海道の風景があり、つらいことも耐えることができました。少年の頃からの憧れの地である北海道に北大の教官として住めるようになることなど、つい７ケ月前までは夢想だにしなかったことです。自治医大退職後は少なくとも１年間は北海道で暮らしてみたいという私の長年の夢は、こうして10年以上も早く実現しました。浅学かつ未熟な私を教官として迎えて下さった北大医学部教授の方々、ならびにそのような先生方を育んだ北海道に、終生変わらないであろう、深い尊敬を感じるとともに深い感謝の念を禁じ得ません。

私は1951年栃木県に生まれ、1976年群馬大学卒業後、海外留学期間（1988年９月〜1990年３月、super oxide dismutase発見で有名なDuke大学Irwin Fridovich教授の教室）と関連病院出張期間を除いて、ずっと自治医大産婦人科で仕事をしていました。多くの妊婦さんと接するうちに産科の研究はまだまだ不十分であることに気付きました。妊婦さん方の素朴な質問に答えられない産科の現状を認識させられたからです。私の代表的な業績の１つは、多胎妊娠では分娩予定日を40週ではなくもっと早期にもってくるべきであること（双胎であれば37週、三つ子なら34週）を実証したことです。この着想は病棟で多くの双胎妊婦に接することにより生まれました。その前段階として、児にとって最適の分娩時期（単胎妊娠も含めて分娩時期が遅すぎると児の健康は損なわれ、早すぎると未熟性が問題となる）はいつかという考えがいつも頭の中にあったためにできた仕事でした。また母児

生命を危うくする産科合併症にHELLP症候群（妊婦が溶血“Hemolysis”、肝機能異常“Elevated Liver enzymes”、血小板減少症“Low Platelet”を示した時は危険でhelpと言っている）があります。突然起こりDICのために母児生命が失われやすいが予知が困難と考えられていた疾患です。ある症例からHELLP症候群に認められる血小板減少症はHELLP症候群の結果ではなく、HELLP症候群発症に先行していたことに気付きました。『妊娠誘発性血小板数減少／低アンチトロンビンⅢ活性はHELLP症候群発症に先行する』この仮説を証明するために多くの時間を費やしました。何故なら、これを証明することは『血小板数／アンチトロンビンⅢ活性を時々測定し、減少する妊婦はHELLP症候群になりやすい』ことを証明することであり、HELLP症候群発症予知を可能にすることができ、臨床的意義が大きいと考えたからです。幸いこれを証明できました。

現在の私の最大関心時は『早期早産を減少させる』です。早期早産の多くが下部性器感染症によって引き起こされています。しかしこの感染症は派手な臨床症状はなく、歯周病のように密かに進行し、気付いた時はとんでもない悲劇が待ち受けているといったものです。早産予防の観点から、どのような妊婦がその感染症に罹患しているかを、安価かつ簡単に同定できる必要があります。この研究は現在進行中で、おおよその見当はつきました。この方法を用い、早産危険の高い妊婦に早期介入することにより、早期早産を減少させられたらと思っています。私に与えられた職は、この研究推進（できたら北海道をコホートとして北海道で早期早産を減少させたい）を助けてくれるかも知れません。

通常、大きな仕事ほど多くの人の協力が必要です。人の和を重んじ、患者を裏切ることなく、誠意を持って事にあたり、最終的に北海道の皆様にお役に立てるような仕事をすることで、私が北大に赴任することを許して下さった皆様方への御恩返しとさせて頂きたいと思っております。

寄附講座「置換外科・再生医学講座」紹介

外科治療学講座・消化器外科・一般外科学分野　教授　藤　堂　　省

寄附講座「置換外科・再生医学講座」は、客員教授に古川博之氏（前北大医学部附属病院第一外科講師、左写真）、助手に陳孟鳳（前北大医学部附属病院医員）を迎えます。本講座では、過去40年に渡って旧北大医学部外科学第一講座で営々と培われ、この数年間北大大学院医学研究科外科治療学講座移植外科学分野で大きく開花した臓器移植と、近年急速な展開を示している再生医学の研究と教育を行うことを主眼としています。

具体的には、1）肝、腎、膵・ラ氏島、小腸などの臓器移植における臨床成績の向上、2）臓器移植における免疫抑制療法の改良、3）臓器移植における臓器保存法の改良、4）臓器移植における遺伝子治療による免疫寛容の誘導、5）動物からの臓器を用いた異種移植、更に6）肝細胞、β-細胞、心筋細胞、神経細胞等の再生医学を用いた細胞治療法の開発など、臓器移植と再生医学に関する先端的な研究を行います。臓器移植のメッカ、米国ピッツバーグ大学で長年研鑽を積んだ両氏が、この分野を更に発展させることでしょう。

21世紀はバイオメディカルサイエンスの時代です。本講座を中心に、北海道大学が日本のみならず世界に向けて情報と人材の発信基地たらんことを期待しています。

お　知　ら　せ

◆　研究科長および附属病院長選挙の結果について　◆

去る2月15日（木）に行われた選挙の結果、新研究科長・新学部長に西信三教授（分子生化学講座分子生物学分野）が、また、新附属病院長には加藤紘之教授（癌制御医学講座腫瘍外科学分野）がそれぞれ選出されました。

任期は本年4月1日から2年間です。

◆ 大学院入学状況について ◆

平成13年度の医学研究科入学者数は、社会人入学13名を含め137名（男96、女41）でした。
　専攻別の内訳は右表のとおりです。

専攻区分	定員	入学者（うち留学生）	
生体機能学	20	3	(0)
病態制御学	30	60	(4)
高次診断治療学	24	42	(8)
癌医学	12	15	(3)
脳科学	14	9	(0)
社会医学	10	8	(0)
小計	110	137	(15)

◆ 第20回　高桑栄松奨学基金授与式行われる ◆

２月19日開催の高桑栄松奨学基金選考委員会で決定された第20回高桑栄松奨学基金各種助成金対象者に対する授与式が、３月６日（火）第３会議室において挙行されました。
　若手研究者に対する奨励賞は、８名の応募者のなかから脳科学専攻の博士課程大学院生矢部一郎さんに、外国人留学生に対する助成対象は、２名の応募者の中から高次診断治療学専攻の留学生趙松吉さんに、医学部６年生に対する奨学金は、総代の中村美智子さんになりました。
　授与式当日は、西教務主任の司会進行により、基金の創始者である高桑名誉教授ご臨席のもと、井上研究科長から３名の授与者に対し、賞状と助成金が授与されました。

◆ えるむ賞について ◆

えるむ賞とは、本学の伝統である「全人教育」の充実をはかり、学生の健全な課外活動及び社会活動を積極的に支援するために、平成９年度に設けられた賞です。この賞の候補者は、自薦、他薦を問わず、多くの活動の中から選考委員会が決定しているものです。
　平成12年度えるむ賞には、医学部４年芦立嘉智（あしたてよしとも）さんと農学部５年小山剛志さんのペアが選ばれました。第27回全日本大学選手権大会（ボート）男子舵手なしペアにおいて優秀な成績をおさめたこと、そして、その活躍が日頃の創意工夫に満ちた鍛錬とともに本学の課外活動の範となることが評価されたものです。
　ちなみに、昨年のえるむ賞は、「とんでけ車いすの会」を発足させ、一般市民の協力を得て使われなくなった車いすを医療機材や設備が不足している開発途上国へ送るボランティア活動により、医学部学生、柳生一自（やぎゅうかずより）さんが受賞しています。

◆ 医学部学位記伝達式行われる ◆

平成13年３月23日（金）10時から本学体育館において、大学としての学位記授与式が挙行されました。これに引き続き、13時から本学部臨床大講堂において、学位記伝達式が行われました。
　本学部の教官および父母等の見守る中で、西教務主任より卒業生93名の名前が呼び上げられ、井上学部長から、ひとりひとりに学位記が手渡されました。
　学部長のお祝いのことばに引き続き、田邉達三同窓会長より祝辞をいただいた後、第77期卒業生を代表して、中村美智子さんが答辞を読み上げました。中村さんは、その中で、「新カリと言われ続けて、はや６年、学部一貫教育の初めての年にあたり、試行錯誤と混乱の続く学生生活でもありました。その一方で、授業にグループ学習が取り入れられ、自ら問題点を見つけ出し考える訓練の機会を与えられたことは、これからの医師として、人間としての基盤が培われたように思います。これから私たちは、21世紀に誕生する初めての医師として、全国へ、そして世界へ巣立っていくわけですが、焦らず弛まず怠らず生涯にわたり研鑽を続けていく所存です。」と力強く述べました。

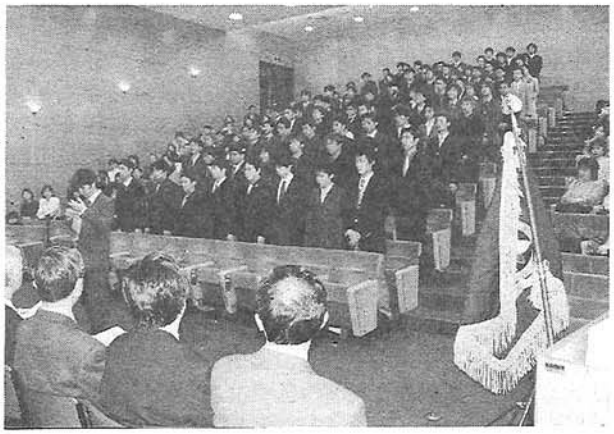
◆ 今年の医学部入学者状況 ◆

平成13年4月9日(月) 本学の入学式に引き続き、13時30分から医学部入学式が行われました。

今年度の入学生は95名で、前期日程定員85名に対し409名が受験(倍率4.8倍)し、後期日程定員10名に対し105名が受験（倍率10.5倍）しました。

入学者のうち道内高校出身者数、平成12年度高校卒業者（現役）数および女子学生数の過去6年間の内訳は次のとおりです。

＜入学年度＞	13年度	12年度	11年度	10年度	9年度	8年度
道内高校出身者数	31	39	38	34	35	49
12年度高校卒業者数	28	35	40	22	39	44
女子学生数	15	19	26	21	18	29



医学部入学式

◆ 新入生合宿研修について ◆

本年度の新入生合宿研修は、4月21日（土）、22日（日）の1泊2日の日程で行われます。

この企画は、2年生の新入生歓迎実行委員会が主体となって実施されるもので、学生による学生生活のアドバイス等の研修も含まれています。

恒例により、土曜日の夜には上級生がクラブ活動の紹介（勧誘）のため研修所を訪れ、新入生との歓談も企画されています。

編集後記

広報編集に携わって、1年を振り返ってみると、医学部では1年間に様々な行事があるとつくづく感じます。1年間様々な行事がある割には原稿集めには苦労した感があります。毎号、昨年の広報を参考にして行事予定から記事を考えていきましたが、スペースを十分埋めるだけの記事を探すのに、毎回編集委員会で頭を痛めました。また、〆切までに原稿が間に合わないことが多く、これも気をもむ原因の1つでした。それも今回で無事終了します。

共に編集に携わっていただいた、寺沢先生、傳田先生、大変ご苦労さまでした。われわれ3名はこれで任期を終了しますが、引き続き富樫先生、佐藤先生は編集委員として残られますし、事務の清水さんも引き続き広報を担当されます。御三方には大変お世話になりました。また今後も、さらなるご活躍を期待しております。

（川口　秀明）

― Home Page のご案内 ―

医学部広報は

http://www.med.hokudai.ac.jp/ko-ho/index.html

でご覧いただけます。また、ご意見・ご希望などの受け付け電子メールアドレスは、

ko-ho-office@med.hokudai.ac.jp

となっております。どうぞご利用ください。

北海道大学大学院医学研究科／医学部

発　行　北海道大学医学研究科広報編集委員会
060-8638　札幌市北区北15条西7丁目
連絡先　医学部庶務掛　電話　011－706－5003
編集委員　川口　秀明、寺沢　浩一、傳田　健三
富樫　廣子、佐藤　松治